慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「人口論」批判(下)
Sub Title	
Author	津田,誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.5 (1923. 5) ,p.751(79)- 780(108)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230501-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第五號

PP. xxv-xxvii 又此時彼には多少の詩作もあつた ある。(Cf. E. T. が軈て Modern Painters の中に纒められたので の中に真のラスキンが現はれてゐる。然かも其 同地の風景や其の印象を寫すに於いては寧ろ手 窺ふ一端としてゐる、Library edition, vol. III, 地に於けるラスキンの日誌を載せて彼の生活を PP. 129-130 义 E. T. Cook は一八四四年の同 (Cf. E. T. Cook - The Life of Ruskin, vol. I, のて極めて多忙な生活を

営んである様を

告げる へた手紙は彼が「雪と花崗石」の觀察に熱中して - 例へば Rev. W. L. Brown に與へた 例へば Walk in Chamouni の如き、 Cook, op. cit., p. 138)

其の計費に就いて否々に詳細を知らしめる。以下其の一部 を抄出すれば次の如くである。 スキンが M.dern Paintersの第一卷を書くに至つた動機と 1.八四四年三月十日附の O. Gordon 宛の手紙ほう

セオヴアに潜在してゐたある日曜

Painters の第一卷を書き始めた。 "Modern Painters." p. 666.) (更にこの計畫に就いては ました。: かまへて、風景美術に関する完全な論文を書からを決心し HH て彼はライン、フランダア の自宅へ歸つて熱心に A (Library edition, vol. III, Let'ers on the Modern スを經て

景の佳い事等は彼の自叙傳第二卷第七九節以下 移った其の轉居の顛末や新しい屋敷の廣い事風 家を引き排つて の影響に就いて語つたもの) 記の第八章並びに第九章(Modern Painters 出版 三年から一八四四年の大陸旅行前迄の記録は上 でなく又打ち覧いだ感は毫も無かつた』一八四 並びに第八章全部に描れてゐるが併し此の新居 中極めてその記錄に乏しい。 に於けるラスキン一家の人々は『以前程に幸福 年の秋十月、ラスキン一家はHerne Hill の 第十七卷 Denmark Hill の宏壯な屋敷へ を除いては自叙傳 第八十二節の一頁 「人口論」批判

> が僅に其の概略を記録するのみである。 ないさ云ふ事がわかつたので愈々此のヒドラの頭の角ました。斯様に規模を大きく企てなくては到底何にも な楽でない事がわかつてパンフレットが一卷の書物にと變 になりました。ラインを下るみちすがら私は常に構想にふ つの頭に殖えて其の頭一つとつが一卷の本さなる事になり けてゐましたが、美術上の問題の論證は思つてゐた程容易 に一時間や二時間では消化 所が雨天の日が仲々來ない 紙をロンドンから受取り其れに就いて私は非常に奮骸しま 床して八時迄にパンフレツトを書いて了か と思ったので した。其日の午前一教會で、誠に奇妙な事ですが、軈て來ら しまつたので家へ戻る迄でパンフレットの計畫を延ばす事 雨降りの日迄パンフレットの仕事な延ばす事にしました。 をしようさ外出しました。 の上に映り初めたので す。で仕事に取り す。月曜日には Chamounix トを書いて批評家を追り込めてしまおうさ決心 したので は連絡の間に凡べてを計畫するのですが、私はパンフレ かさ云ふ事が間遠もなく常に教會できめられるのです、 んさするものに就いての私の決心は全部、やらうか止さう 日の事さ憶ひますが 所が一卷が中牛り纏まらぬ内にヒドラの様に三 掛つたのですが旭日が Dome Royal Academyの評論を載せた一 落着いて仕事が出來す 水曜日にも同じ事が起つたので しきれない程の材料が集まつて へ赴き、火曜日は朝四時に起 その内に到々書き始める前 の頭の角なつ到底何にも出来 du Gouté

めた。 當時の美術界、文學界に一大波瀾を引き起さし 八四二年の冬から一八四三年にかゝる期間は、 彼の生涯中最も特記せらるべき期間であ

更にラスキンの思想の發達とに就いて語らう。 以下『近世畫家論』第一卷の發行と其の影響。

人口論 批判 · 子

田

に存し、 U に在りて他の何人の掌中にも在る事無し」と云 現存社會組織の弊質を否定し富者階級の救 ルサスは「貧民の貧民たる原因は貧民自身 隨つて其境過改善の手段は彼等の掌中

第五號 七九

貧民自身に存するにあらず、更に大なる禍因は してはゐない は決して個人の勤勞、 の勞働は不斷に富者の搾取する所となる事情有 該三要素が夫々歸屬する所を異にし、 個人の貧富は正確に各個人の責任 於て るを以て、 3 を以て其樞軸と爲し、 は勞働階級は常に資本階級に隷属し、 地資本勞働の間に完全なる融合の存する社會に 競爭は單に法律上の名 所 律に歸してゐる。乍併、 は の資本主義的生産組織に於ては、 經濟組織の根抵に潛在せりと云はざるを得 然も敦貧其他の適當なる緩和手段を質施す 任を解除し、道德的抑制を以て貧者のみの 勞働に對する機會均等なるに依 貧富の懸隔愈々擴 故に貧民の貧民たる原因は單に 或は勤勞心の程度に比例 唯是に依つてのみ回轉す 目に止 生産の三要素たる土 大せられ、 まり、 なる 然も利潤 可含多 且つ貧者 經濟的に 然もそ 人の自 9

> 正の観念に背戻するも 可き恐怖に萎縮しなければならぬ。こは明に公 か、或は一旦之を享受するも不断に之を喪失す **開灓の怡樂の如きは遂に之を享受するの時無き** 方に、貧者は終生貧困の脅威の下に唯自己一身 を維持するに孜々として、温暖なる爐邊に家族 富者は財査と子賓とを併有して愈々繁榮する一 搾取して得 充足に依 つて彼れ 時は ス かる企圖にも亦左袒を躊躇してゐる。 上の弊害を若干脛減 たる富に依つて安全に支持せられ、 つて産出する多數の子女は、其拱手 の論旨に從へば富者が其本能の不屬 のと云はなくてはなら し得可さる。 ~♥*

神的快樂を追求し得る上流社會に於ては、先見 なる財貨で閑暇を有し藝術に思索に高尚なる精 以て貧者にのみ强ゆるは至難である。 更に實際的見地より省察するも道德的抑制を 蓋し豐富

D

を要求す可しとせば精神的に向上せる、 等高尚 **强制するは不公正にして且つ不可能と云は** 無しに叱責し能はざる所である。 其ものは是認する能はざるも然も心有る者の災 屋に群居する弊等諸般の原因と相 で富貴に奢る人々が何等拘束無く淫佚放逸に耽 せざるが故に、 K の餘裕を有する富者に對し、 弱者たる貧しき人々にのみ所謂道徳的抑制 τ 明智に 間の過失に陷り易き事情が有る。 ならぬ 級然 址 ちざる 悪風を示し乍ら、 下層社會に於ては時間 之を恪守する事 ル趣味を 涵養し 依り假に道徳的抑制の必要ありとする 岩し修養無き、 不斷の貧苦より は或は比較的容易なる可 て簡を散ず 迫を理由に道德的抑制 的に将た經濟的に何 或は修養の餘裕無 社會に惡風を垂 生ずる自 況や一方に於 俟 可き除裕を有 獨り社會上 固より過失 つて勢ひ雨 或は向 なく É

> 示するを理由に、 を要求するのが更に公正の道では無い平。 p る意味に於る道德的 抑制

無い。 となり 減する 爲に生ずる害惡は社會の全般に蔓延せざるを得 容する時は、 之を救濟せんとして生存權或は幸福追求權を許 ては貧窮惨禍が一部の民衆を迫害するも、 的倫理視に發生せる事を述べた。約言すれば彼 敷の最大幸福を人類行為の基準と爲す功利主義 に彼れ に男尊女卑是認等の諸論旨が悉く共論據を道徳 生存權或は幸福追求權無き現存社會制度に於 |抑制の獎勵に置き、且つ其根柢に於て最大多 スの所説の中に散見しないでは無い。 固 d b 即ちそれは現存少数者の痛苦を比較的輕 代りに多数の困窮者を續生せしむる結果 の私有財産制度擁護、家族制度唯持、 **遂には全民擧つて人口の壓迫に懊惱す** 此種の難詰に對する一應の辯解は 各人の放逸なる本能充足を促進し 私は先 旦

第五號

第十七松

現今に於ては到底成立するを得ない。蓋し往時 きは貧窮者が社會成員の僅小なる部分を占むる 義とする功利の原理に依る時は現存制度を以 る悲境に沈倫す可さを以て、幸福の數量を第一 認識せざるを得ないと云ふのである。 假命完璧ならざるまでも、比較的最善のものと ある。果して然らば最大多數者が不斷の困窮に き制度組織は到底最大多數の最大幸福なる理想 るものが、 に適合するものと云ふを得無い。 少數者の富を以て多數者の過大なる貧苦を輕減 代に於てのみ承認せらる可き議論で有つて、 功利主義を以て道徳の指標とするも、 増せるは各國經濟學者の統計の明示する所で かくる懸隔を日と共に益々擴大せしむるが如 國民の從屬概念に過ぎざり 一方最少數者が極度の快樂に耽溺し然 今や國民の絕對多數を包容する程に し無産者階級な 等の過剰なる 乍 斯の如

> 義經濟組 科學的社會主義の鼻祖 Karl Marx 立ちて、然もゴドキンの如く空想に逸走せざる を得ざり一爲である。そは彼れと反對の立場に 察すれば自ら闡明せられるであらう。 するも止 する事が 駆竟マル 隨つて又道德的抑制を貧者のみの飛律に歸 むを得すと思惟せるは、彼れが資本主 功 織より發生する弊害を正確に洞見する 利の原理に妥ふ所以では無 サスが貧窮の原因を貧者自體に歸 の所説を省 4 平。

以外、 大なる感激は事ら黨派的利害より生じたのであ 含してはゐない。「此パンフレットの惹起せる偉 の態様に於ては先哲の所論を皮相的に蹈襲せる る。佛蘭西大革命は夙に英國に於て情熱的擁護 者を見出してゐた。然るに十八世紀中に徐 Marx 彼れ自らの創見に成る章句は一として包 に從へばマルサスの「人口論」は其最 4 12 初

増の傾向より生起する憂惧も、彼に從へば唯現 唯或る時代或る民族に限定せられたる歴史的法 見したので無く唯蒐輯したに過ぎない材料を追 存資本主義的經濟組織にのみ特有なる現象で有 則に過ぎずと思惟する故である。 先天的範疇としての人口の原理を否定し、そは Untermann's. Trans. Vol. 1. PP. 675-676. note.)° 加する事に從事したのである」。(Marx:Capital 材料を其著に詰込み、更に新奇なる、然し自ら發 痛く驚けるマルサスは次いで淺薄に唯蓄積せる 政治の歡呼を以て迎ふる所ごなつた。此成功に 切の願望の偉大なる破壞者として、英國の寡頭 せられたのである。それは人類進步に對する一 的危機の最中に於てい 等の所説に對する的確なる解熱劑として宣言 上げられたる此「人口論」は、 Marx、が「人口論」を非議する所以は畢竟 聲を大にしてコンドル 隨つて人口過 斯く一大社會 Ł

> 論第一卷第十二章「資本側蓄積の一般法則」の中 つてい 然滅失す可きものである 彼は其理を其著資本 に三段に分つて評論してゐる 一旦社會組織に變更ある時は此現象と當

生産行程に於て何等其價値の大いさを變更しな 部分である。 二は不變資本で勞銀以外一切の物件、 いからである (Marx Op. 身も亦變化し得る性質を有するからである。第 の此 資本部分である。其可變と稱する所以は、資本 を再生産するものであつて、更に此餘剰價値自 等價と並にそれ以上の超過價值即ち餘剩價值と る。第一は可變資本で勢銀として支排に供する 彼は資本を價值增殖行程上より二種に區分す 建物、 の部分は所謂勞働の搾取を演じ自分自身の 原料 其不變を稱する所以は勞銀と異り 助成料等に轉化せらる Cit. Vol. I. PP. 232-例へば機 \ 資本

第五號

第十七卷

(七五五)

級は最も有利なる狀態に置かれる 假定し、 勞働者の生存基金を増進す可きが故に、 を運轉するに常に 此勞銀昻騰は一面に於て勞働者が資本家に給付 彼等自身の勞働に依つて産出せる産物中、 に於ては資本の增殖と正比例に勞働の需要並に に及ばす影響を研究する。 しむる限度にまで達し得るものでは無い。 扨て第一段に於ては右の資本組成に變化無さ 減少を意味するに外ならぬ。 換言すれば一定量の生産機關即ち不變資本 隨つて其境遇は自然改善せられる。 決して資本主義生産方法の特性を危險なら 一層大なる分け前を勞銀の形に於て取戾 此場合に於る資本の增殖が勞働者階級 | 剰價値の中資本家に搾取せらるゝ分量 同一量の勢働力を必要とすど 明に斯かる事情の下 而して此分量減 換言すれ 即ち彼等は 然るに 勞働階 ば其生 從來 畢竟

場合。 げざる為に、 б 一時

(Marx: Op. Cit. PP. 671-680) 現象を説明して一の場合には勢働者敷の過少に A 其價格を過大ならしめたのである。然るに此 に資本の相對的減少が搾取す可き勢働力或は寧 増大が資本に不足を告げしめたので無く、 力又は勞働者人口の絕對的或は相對的增加率の 生せしめたのである。又第二の場合に於て勞働 反對に資本の過剰が搾取す可き勞働力の不足を て勞働力又は勞働者人口の絕對的或は相對的增 **发に於てか吾人は** 是れ冠履を顚倒せる經濟學者の錯覺である の減少が資本を過剰ならしめたので無く、 他の場合に は勞働者敷の 過多に 歸せ る 知る。 右の第一の場合に於 反對

資本の技術的組成に何等の變化無くして資本蓄 的に減少する場合を考究してゐる。前段の如く ふ集中の進行中に於て、可變資本部分が相對 第二段に於て (七五七) Maix は資本の蓄積並に是に 「人口論」批判

> 場合の何れかに關聯する。 資本蓄積に基く勞働價格の ・昂騰は、 左の二個の

し、其爲に資本蓄積が緩慢でなり或は減退する (一)、勞働價格の昻騰が資本蓄積の進行を妨 (二)、勞働價格の 昻騰が 利潤の 刺戟を 鈍ら 其昻騰を繼續する場合。

二の場合に於て資本の蓄積は縮少し、其縮少と 再び資本の 價値增殖欲に 適應する水準に どの間に存する不均衡は消滅する、 共に縮少の原因、即ち資本と搾取す可き勞働力 くて資本主義的生産行程の機械的作用は其れが て高低何れなるかを問はず 今第一の場合に關しては多言の要は無い。 的に創造せる障礙を自ら徹去するので 此新水準が勞銀昂騰開始以前の舊水準に比 -低落する。 勞働價格は まで

分が不變部分に對して減少するに至るものであ 態に停頓するを許さない。 資本主義的生産行程の特徴として永く斯かる狀 積の行はるへは労働者にとり最も有利なる 必ず資本中の可變部

手段たる勞働生産力の増進、 從前より の團結等の社會的事情に依つて文明の發達と共 が出來る。 は 間を可及的延長する事である。 應するには唯二個の手段が有る。 餘剰價値を搾取しなければならぬ。 には其使用する勞働者の勞働より可及的多量の 漸次其作用を制限せられる。爰に於て第二の 蓋し資本家が可及的多大の利潤を收受する爲 Marx 此手段に依る時は は多量の價値を産出せしむる事を考案 の所謂絕對的餘剩價値を增大する事 **乍**併それは勞働法案の進步、勞働者 Marx 即ち一定時間内に 此手段に依る時 此目的に適

生産 態を更新し追加資本同様に、 産力を増進するには資本中の一層大なる部分を 生産方法は發達 不變資本部分の相對的增加は勞働生產力增進の 生産機關に投するの必要あり、 除剩價値を増大する事が の增進せるに隨ひ右の如き性質の資本主義的 然的結果となるのである は勞働生産 事情に依 する。此變化は單に追加資本に於ての分行 ひ資本の蓄積は増進する。 力増進すれば原料の消費隨のて増加する等 くにあらずして、舊資本も亦時到れば其舊 可變部分は其不變部分に比し不斷に益々 其相互に與ふる刺戟の復比を以て資本の 成に變化を生ぜしめ、此 り結局(A)不變資本部分の相對的增 力均進の必然的條件であり、 道に此生産方法の發達する 出來る。 約言す 從前より少重の勞 叉斯 此兩個の經濟的 然るに勞働生 變化に依つて れば資本蓄 くして勞働 $\widehat{\mathbf{B}}$

> ある。 に、 方に於て新たに變化したる組成を以て周期的に さに比し益々僅少の勞働者を吸引し、同時に他 資本部分が相對的に減少するのであるから、 働を以て從前 6(PP. 681-689)° の勞働者を益々多く驅逐する結果となるのであ 再生産せらる、舊資本は、 積の進行中に形成せられたる追加資本は其大い 得る完成せられ 可變資本即ち勞銀として支棚に供せらる 斯くて其勢動者に及ぼす影響如何と云ふ より多量の機械及び原料 たる技術的形態に生れ 從前其使用したる所 第五號 を運轉 代るので

を以て促進せらるゝ可變食本部分の斯かる 繼承して有名なる産業豫備軍の説を樹て、 的増大に伴ひ、 相を摘發する。 更に第三段に入つて 經濟組織に特有なる相對的過剰人口 且つそれ以上の急激なる加速度 即ち旣逃の如く總資本の加 Marx は前心の研 の眞 速度 資本 究を

を作り出すのである 園に正比例して勞働者人口の相對的過剰を造り 出すのである。 主義的蓄積そのものが絶えず自己の能力及び範 手段たる可變資本より の絕對的增加、換言すれば勞働者人口が共雇傭 適應する以上の過大なる人口、 かの如 は くに見えるのである。然し實際は資本 却つて反對に表面上恰も勞働者人口 換言すれば資本の平均的膨脹欲 も常に一層急激に IJ **ち**人 增加 П 過剩 せ

歸屬する所の、自由に處置し得る產業豫備軍を 用を以て養成せる 本蓄積 其必須條件である。 關係に、 成 更に するのである。それは現質の人口増加とは 搾取に委す可く準備せられたる一群の人間 如説の勞働者人口の相對的過剰は営に資 の必然的結果である許りで無く、 資本の膨脹欲の變動に應じて何時に (七五九) かの如くに全く絕對に資本に それ は恰も資本が自己の費 「人口論」批判 同時に

以上の騰落は勞働者の結婚を促進し、 備軍に分割せらるへ比例の變動、 決定せられるので無く 環の周期的變化に應當するのである。 では無い 騰落の一般的運動は である。斯くて全體として通視する時は、 的限度とは無關係なる産業像備軍を要求するの 處置し得可き勢働力分量を以て滿足し得るも して人口の自然的増加が供給する所 の騰落は勞働者人口の絕對數の變動に依 つて事ら支配せられる 料 學者の獨斷說に從へば、 度に依つて決定せられるので有る。 口の相對的範圍の增減、 Ľ が産業に或は吸引せられ或は吐出 1F 出すのである。資本主義的生 そは自 己の自由活動の爲に、此自然 此産業豫備軍の仲張收縮に 勞働階級が現役軍と豫 此伸縮は又更に産業循 勢銀の生活必要費 更に換言す 換言すれば過 0 随つて勞 隨つて生 從來の せらる れば過 座は決 自 つて 勞銀

第五號

(PP. 689-700. 尚此項、 | 資本論」に現はれたる人口論議の大要である 所であつて、人類社會には實在せずと云ふのが てこは資本主義社會にのみ特有なる人 既に幾度も幾度も經過してゐるであらう。 業上の戰が戰は つて、 が準に低下 って人 抽象的絕對的人口法則は、獨り 3 經濟理論的 サス以後の正統派經濟學者の提唱するが如 る人口 渉せざる儘の動植物に取りてのみ存在する 亦變遷す可き一の歴史的法則である。 勞働人口 錯覺である 過去に於て變遷せると同様に將來に 智の發達に伴ひ生産方法が進步するに 少 しむさ云ふにあれざも、 O) 批判上二六个 n 絕對的增加が再度等銀を從前 勞銀昻騰の結果實際に勞働能 其勝敗の決せらるい 加が質現し得る以前に 小泉信三教授一社曾 一三二頁參照)。 人類が有史以 そは大い 口法則で 畢竟 組織 於 齑 0)

人のものとして支持する論據は著しく薄弱で為 所謂 喜一憂しつゝ、所詮相擁して悲境に轉落し行く る最も權威有る批判の一たるを失はぬ。 則は、疑も無くマルサス「人口論」に加へられ らざるを得ない 私有財産制度是認の上に築かれたる社會組織が 會に於る勞働者階級が如何に不斷に生活の不 可き過程を極めて合理的に究明してゐる。假令 を寄與するとするも、 のである。 向より來る生活上の 再三資本蓄積が雇傭勞働者を吞吐する為に つて ふに 成する以上は、マルサスが之を以て最善恆 道德的抑制の獎勵普及に若干。 更に檢討を進むるに如上の批判は 脅威せらるへ 勞働者階級が其自然的人口過增の 上の Marx 約に 歴迫を感受する以前に、 他方に於て斯の如き弊害 かを遺憾無 Marx の資本蓄積の法 の論説は、 資本主義社 間接的援助 摘發せるも 72

於ては **衡を生ずる危惧をば胚胎せざるかこの問題に關** と云ふを得るであらう乎。そは固より痛烈なる 盾有る事を指摘してゐる。 的に資本の完全自由なる運用を阻止する所の矛 のと許容するを得るであらう乎。 は、徹底的の論究を飲いてゐるからである。 經濟組織に於ては何に放人口と食糧の不均 を明瞭に披瀝してはゐるが、 サ 同じく共著「資本論」に於て「利潤率遞減の ざる時に比して遙に資本の利用を増大す可 土地、資本の公有の實施せらる、時は其の 」を始め、資本主義的生産方法の發達が自縛 的經濟組織に特有なる相對的 不充 相違無きも果して致命的の瘡痍を與へし スの 今日多數の學者の認容する所である。 學説を根柢より 分である。 如何
こなれば Marx は
資 完全に潰滅せ 獨り彼れのみなら 然らば社會主 明に此點に 人口過剩 B 80

然しそ と固執 るが、 ては、之を完膚無きまでに搏撃せるものと云ふ 隨つて亦資本主義的經濟組織を恆久最善のもの が有ると云ふマ き生存資料を凌駕して増 述の彼れの論説はマルサスが私有財産制度を、 を怠つてゐる。尠く共論及が不充分である。 サスの人口法則は完全に破壞せられたりとは云 せる罪悪惨禍に墮せざる、他の事情に 得ない 、然らざれば人口増加が所謂道徳的抑制の らる可き事を論證するにあらざる限り、マル を遵守する以外の、 加よりも尚急速に行はる可き事を論證す n 人口は する事に對しては有力なる非難を提示す 道理である。然るに に基く生存資料の生産額の増加が人 若し土地及び資本の公有の 何等の ルサス 制限無き時は之を支持す可 而して又マルサスの擧示 人口 加する所の潛在的傾向 の原理其物に對し Marx は此用意 實現せら 依り制限 3 11

第五號

八九

第十七卷

(七六二)

速度に 社會主義社會に於て表面に顯現し來る結果を招 後に隱蔽せられてゐた自然的人口法則が、 致する道理である。 ト 聴に於ても尚生存資料の生産は人口増加の 會に於て其特有の歴史的人口法則の爲に背 追隨する能はずとせば、そは個々資本主 果然

の傾向を一片の杞憂に歸せしむ可き事山を生物 の繁殖力が將來に於て減退し、 生存資料の生産が却つて人口増加の速度に凌駕 を出でない。一は積極的に科學の發達に依つて 學上より推論する事である。 し得る可能性を論證する事、 根本思想を徹底的に打破す可き論據は畢竟二途 如くに論じ來れば、 マルサス「人口論」の 他は消極的に人口 隨つて人口過增

想主義的精神の勃興と相呼應して、功利主 紀に於る驚嘆す可き科學の進步は熾烈な

産物の 前の社會の典型は謂は、苦痛經濟若しくは窮乏 足りない。「人力が 有力なる論據とする收穫遞減の法則は恐るくに は除剰經濟と称す可きである」。人口過增論者が 經濟であり、 るに必要なる勞働量を輕減する。一の場合には に供せらる 滅せられ、 生産せられたる財貨の形に於て保藏せられる。 餘剰生産物は餘剰精力の形に於て個人の中に保 蓄せられずに、 貨を創造する。 形せられ、精力は又勞働として更に新たなる財 財貨は消費に依つて效用と化し效用は精力に變 び財貨へと不斷に變形せらるく資金としてのみ し成長するのである。 分配を行ふ事を期するものである ✓財貨の分量は増加し、 他の場合にはそれは此精力に依つて 他の社會のそれは快樂經濟若しく 餘剰生産物は永久資金さして貯 唯財貨より 自然に打克つ毎に社會の消費 生活、 勞働、及び幸 之を生産す

> る幾多の樂觀論を輩出せしめた。 範圍に於ては圓滿無碍なる社會の到來を期望す 人生観を否定 しきに亘り形影相伴へる憂欝なる 動くとも經濟生活の關與する 九〇

良なる準備を整へるが如き方法に於て、餘利生 て一般の幸福を増進し且つ將來に對して一層誇 する事無く、又寄食階級を創造する事無く却つ **遠を看過せるものである。前者に於る文明は其** るが如き良好なる狀態に置かれたる社會との相 餘剰生産物の公正なる分配に全思索を集注ー得 する人々は、是れ第乏の征服に苦鬪せる社會と、 の攻究を基礎に明日の經濟事情を豫言せんと欲 統に基 Patten は以爲らく、「羅馬ヴェニスの經濟事情 福祉の為に善用し、 然るに後者に於る文明は餘剰生産物を共同 遂には是に打克つ事に努力しなくてはなら * 窮乏の程度を可及的最小限に食ひ止 活力及び生産能力を減退

今の如 質である。 の祖先が常に面接し畏怖したる窮乏の脅威より に活氣を與ふる餘剩生産物である。 福は斯く 12 人は軍國主義が漸時産業立國主義に驅逐せられ は此期望を裏切るものと思惟するを得ない「吾 現代を匡救するものである」。現存の諸般の慘禍 つゝあるを知る、然も軍隊の權力及び能力が現 てゐる。產業界に直接至大の關係有る禍害に就 顯著なる時に於て、國家を其權力の中に掌握し いて見るも亦是と同樣である。貧民の受くる貧 が相共に併存する」。然し一旦吾等の文明の基礎 明と成り行く時に於てすら、掩ふ可からざる事 酷、権勢は新たなる經濟組織の基礎が益々平 慘禍、 彼等は恰も裏面に於る其勢力の崩潰が最も **〜 强大で あつ た時代は未だ 曾て無かつ** して相互に連結せられ、 虐使、 過渡時代に於では舊思想と新世界と 歴制 並に富者の有する貪婪、 其尺度は彼等 それは音等

「人口論」批判

30-34)。
30-34)。

産能率であると見るのが尠くとも眞理に近い。 ものは人口と食糧では無く、人口と富、 粒生産に利用 云ひ得るやうに考へられるかも知れぬ。然しか るが故に、 サス 人口問 くる結論を導くは誤りである。 更に 闘爭 せられた後の話であるが 貧民階級に於る豫防的思慮は恐らく薄弱な の前提は或は正しく見えるかも知れ 題の論議に取り入れてゐる。曰く「マ Seligman 地球表面の總ての廣汎なる處女地が食 彼れの憂欝なる豫言も亦適中したと それは總ての耕作に適する土地が せらるい遙遠の將來に就きて考慮 は此種の樂觀思想を最も良く 眞に相對峙する ーが起るものと 或は生 Ŋ 加 w

の學説は近代社會に於ては其恐怖を消失したの は急速に増加するであらう。 あらう。良好なる狀態に於ては人口は徐々に、富 學的諸要素を發動せしめるであらう。斯くして 口 迅速となり得るのみならず、 程食糧の價格は騰貴す可きも、 は一層増加するであらう。 率の齎らす收穫遞增の爲に阻止せられる。成る 地の收穫遞減は、 ば、それは食糧に變形せられる事が出來る。 經營は、 故ならば農業生活に於て眞の集約的資本主義的 らである。 人口を凌駕す可しと解するが至當である。 方面より富と人口との對峙は緩和せられるで の増加率を減退する傾向ある經濟的及び社會 未だ曾て大規模に行はれた事は無い 若し土地に投資す可き充分の富有ら 増加は殆ど無限の期間 一般産業の急速に増 獨り富の増加速度が それ故に人口過剩 宮の増加其物が人 之を購買する富 大する 直に直 つて 能

どらな」を(Seligman: Principles of Economics PP. 64-66)?

依つて の到來を主張する所論は、所謂思想の右傾せる 類が尠くこも經濟的壓迫より解放せらるへ時代 は現存の社會組織を以て恒久至善と看做し、 を質現し得るまでに人智は既に發達せるか、或 社會的不平等不公正の禍根を剿滅し得るに停ま 日の諸般い害悪も人智の發達に基く財の豐饒に 人々の中にも亦左傾せる人々の は發達・可言可能性 斯くの如き科學至上の見地に立ちて總ての人 織を代位せしむるを條件として、電に今日の して何れも共に人口 の雑護 進んで一切の經濟的第三を知らぬ樂天境 或る者は現存制度を崩潰し適正なる社會 制度の變更を待たずに匡救 者を見出す事が出來る。 有りて主張するのである。 の膨脹が豊饒なる生存資 中にも、 即ち或る者 可しと思 等しく 仝

> 間す可含乎。 で有る。吾人は此駁論を如何に評 を業の現實の或は豫想的の生産力を楯に、マル を業の現實の或は豫想的の生産力を楯に、マル るに於ては一で有る。吾人は此駁論を加へんとす るに於ては一で有る。吾人は此駁論を加へんとす るに於ては一で有る。吾人は此駁論を加へんとす

有る。 定の限界點に達すれば、 を、魦くこも充分正確に重視しなかつた恨みが 此法則を質地に應用するに就いての制限的條件 抱ける概念は大體に於て真實である。 つた事である。收穫逃減の法則に關して彼れの 遊杭せられるものである。それは土地耕作上一 歩其物は寧ろ必然的結果として豫想し乍ら、 今日に見るが如き威力を完全に洞見し得 思ふにマル 收穫遞減の法則は反對傾 サスの見解の 他の事情に變化無き限 一弱點は、 向に依つて時に 然し彼は 科學の進 15

第五號

九

せらる る後社會の發達に依り此最初の設備が一旦完成 地よりも貧瘠の土地の方が先に開拓せられい の遞増を見る事も 投ずる追加勞働が收穫を根對的に減少せしめず 一方に、 他の事情は變化無しに持續するものではない して却つて増加 分業の擴 る收穫が相對的に減少する事を主張する。然し 上る關係から、 続等に要する最初の資本、 限界點を厳密に確定する事は至難である。 へば人口 要具の形態に於て資本を追加 又斯かる改良せられ **〜時は收穫は相對的に減少せずに却つて** 本及び勞働を追加する毎に、 張を可 其食糧生產 の増加は せしめる事も有り得る道理であ 能ならしめ、 或は其他の理由から豊沃の土 有り得可きである。 の為に一層組織的經營並に 食糧に對する需要を高める たる耕作法は肥料或は 勞働の失費が多額 其結果土地耕作に Ļ 是れに對す 或は灌漑 以て收穫

優る衣食を享受するに至る可し」と云つてゐる。 俟たば敷世紀の間現在の二倍若しくは三倍の人 の力を主張せる點は「人口論」全卷を通じて極 生する禍害を排除する手段として積極的に科學 と斷するは疑も無く誤謬であるが、然し又一面 つて激増せらるゝ所以を考慮に加へざりしもの 力を道德的抑制と云ふ消極的手段の獨獎に傾注 めて稀有であり又微弱である。 より省祭するに、 随つて彼れが生存資料の生産が科學の進步に依 を包容し得可く、然も此王國の何人も現在に の 發達を豫知し乍らも尚近代産業の長足の進 彼れが人類の性欲を過重視する一方に、科 「我國に於ては國民産業の適當なる指導を より崩潰するで有らうと批判してゐる。 コドキ は僅々三十年を出 彼れが人口過增の傾向より ンの希求するが如き無政 でずして物質 殆ざ其全主

> ある。 Political Economy in England. PP. 49-51)° 全に豫見し得なかつた事は慥かである」(Price: 化の導く效果を無視せるものと称するは失當で 事も有り得るであらう。 可き所を新用途新作物の 斯くて舊用途の或は舊作物の收穫ならば減少す 進步せる耕作の構梯に於ては土地は種々の異る 増加する事 然し彼れが其效果の及ばす範圍程度を完 情も起り得るであらう。更に又一層 せられ、或は異る作物を播種せられ マルル 收穫は増加するに至る サスが如上の諸變

遞減の傾向を相殺して除り有る可し」と云ひ き理由 を以てい せられたる生産要具の使用は長期に亘つて收穫 定の生産方法を基礎としての立言を解せらる可 等額だけ、 既に述べたる如くマルサスが食糧は算術級數 あり、其上彼は「耕作經營の改善、改良 換言すれば二十五年毎に最初の産額と 増加し得るに過ぎずと云へるは、

のである。

歩を完全に洞見し能はざ

し弱點を明示する

かつた。 ならい。 現する可能性は絶無であると裁斷し得るであら 代表せしめたる科學至上論者の所論は此マルサ すると云ふ良好なる狀態は恒久に持續するを得 手段を激励し且つ期待するのである。 極手段を無用として廢棄する代りに、 を說くに强く スの弱點に對して最も傾聽す可き抗議を提示す るであらう乎。人口過剰の恐怖が將來社會に再 サスの中庸を逸したる論點を指摘するものとし るものである。 前掲の Patten 及び 私はかくる樂觀論の承認に躊躇を禁じ得 彼等の批判に多大の價値を認めなくては 然し「人口は徐々に、 是れに反して如上の樂觀論者は前の消 積極的に科學の權威を說くに マルサスは消極的に道德的抑制 Seligman 富は急激に」増加 の言辭を以て 故にマ 後の積極

第十七卷

ざるものである。

給は、 ある。 つて めるに至つた。 に至大なる改善の行 弟に人口を充満し始むるに及んで、 に増大せしめ、 の生産をして人口の増加よりも適に凌駕せし 莫大なる増加 質際に於て 有の比率を以て しより前 反對に人民の多數に 對する所の壓迫は 界の人口は再 自然の勢力に對する人間の支配力を無量 運輸並に生産方法の態異す可き發達に 歐洲諸國民の 世紀に於て 然しか 既に過去數年間に於る生活質 爲に世界の工業國に於る人口は を見た。組織的經營と科 れ自ら解決するものでは無 び生存資料の限界まで増 增 消費に供せらる 13 文则 加せるに拘らず、 \る事質は新興諸國 57 列頭の のは て甚だし 長き間に遂 からず、 ゝ食料の支 なる事質で 口が生存 生存資 學は、 が次))]]

私は疑ふものである。
カを過大視するの傾向に陷れるにあらざるかをの最も驚異す可き時期に當面せるが為に、其威免れざりしとすれば、前掲の樂觀論者は其發達を瞥見せるが為に、其威力を過小視する傾向を

-

関は 種族の進化は種の汎 **論據を求むるものである。** はれ は始め 個人性の發達とは反比例をなすものである。 4 消 過 まぬものである。 個人を創造 しむる為に起る サスの學説に對する今一つの 30 失するであらうと。 少の現象は起り得可さも、 Spencer 換言すれば個人が自己の個 する の唱導に依り、 力即ち蕃 布或は創生を犠牲に供して 勢力集中の作用は、 隨つて文明の進步に伴ひ 以爲らく人口の增 殖力を減退せざれ 人口過剩 生物學上 重要なる 人性を發 新たに の危 12

第十七卷 (七六九) 雜 錄 一人口論」批判

Population, Everyman's Library, PP. xi-xii)° (Lagton: Introduction 方の人口 機的事項で有る事に留意しなくてはならぬ」 である。 依つて決定せらる可き事が自叨の公理であると やは固 將來に 間に激烈なる競爭を惹起す可き前兆たるを示唆 科學が爾後如何なる貢献を爲す可き運命に在る する者すら有るのである。 大陸の存 の範 は此 より 此兩要素の後者が る人 の増加と他方の富源の増加との均衡に 如 自 が近世産業發達の未だ幼稚なる初 然の富源は無濫滅では無い。 豫知する事不可能なるも、 類の物質的幸福が、 に運輸上の革命有りとも、 しな 致する事の出來る溫帶には新らし い事を知つてゐる。それ故に to Malthus' Principles of 問題に關し工業諸國 絶對に不確質なる投 か \る競爭は不可 窮極に於て一 兎に角吾 最早文 前して 抗

を解除する ば現存の分配制度を改善して人口に對する制 サスは看做したが、それは吾人の先に述べたる 充塞せる人生の饗宴に列せんと企圖せる者に對 飢饉は自然の意を冒瀆し 適用 若し其生産する富を一層廣く分配せしむる としてそれと密接の關係有る富の分配の見地よ する一書である。彼れに從へば「人口問題は主 包容し得可 織の下に一定の人口を包容し得る國家ならば、 此學說を人口問題の社會學的經濟學的考察に 将祭す可きものである。 自然の賦課せる恐ら可き刑罰であるとと 組織に變更する時は、 せるものは 場の不備と經濟組 も自然的原因に發したのでは 時は、 しと断言する事が出來る」。 Nitti の「人口と社會組織」を題 人口は一層急激に T 織に起因せるものであ 遙かに多大の人口を 吾人は現存の經濟組 總ての座席の既に 膨脹して更 往時 如き

· 五號 · 九七

勢の衰微を招ける事實を史上に經驗した。 然る後忽ち生殖の遅滯の為に人口稀薄となり 被るものである。 現せし所である。要するに「生殖率はマルサス 來に可能の事象たるのみならず、既に過去に 向を生ずる所以を力説する。然もそれは啻に將 文明に伴ふ個人性の發達が必然生殖力の減退を 生殖率停滯の爲に沒落した 及びマルサス主義者の知悉せざる法則の支配を 方に於て外しく未開の狀態に在り 代に達する時は富は増加し の古代文明國は侵略或は戰爭の爲で無く單に 新文明の中心となれる事質をも目視 原因の影響に依 の制限を必要とす は爱に於て前掲 随つて人口過増より 吾人は一國民が文化の黄金 つて急激に人口 Spencer の學説に馮依 る結果に陷らざる乎。 のであ も寧ろ人口過少の 人口は稠密となり 3 を増加し、 國民が した。 N サ 叉他 質

であない。そは歴史と人口學に偽瞞せられたるであない。そは歴史と人口學に偽瞞せられたる神秘のみならず又人類文明の或は興隆し或は衰融通の利かぬ方式に拘束せられて、獨り貧困の耐がのみならず又人類文明の或は興隆し或は衰酷する逆轉作用をば説明し得ざるものであるとの人口法則は何等の眞理をも包含せず又説明しの人口法則は何等の眞理をも包含せず又説明しの人口法則は何等の眞理をも包含せず又説明しの人口法則は何等の眞理をも包含せず又説明し

今經濟組織の革新を行ひ分配制度を改善する 時は、生産機關の發達並に經營技術の進步著し 時は、生産機關の發達並に經營技術の進步著し である。年併、個人性の發達其物が將して生物 である。年併、個人性の發達其物が將して生物 の必然的法則に依り生殖力を減退するであ の必然的法則に依り生殖力を減退するであ の必然的法則に依り生殖力を減退するであ

選せる生産方法を農業上に充分に利用するを得は興味多い。彼は資本主義社會に於ては最も發試に此點に於る Kautsky の觀察を參照する

には、 きを豫言してゐる。 交々發生する可能性があると想像してゐる。其 於て Nitti と其見解を一にするものである。然 人口過增の禍害を防遏し得 口過剰と云 百年間は如 **賣素斷絕に依り花柳病に依る不姙原因の撤去等** 人口過剰の憂惧を豫想する所以は彼れが「窮困、 し彼れが百 る諸種の障碍有るを述べい 質現を見 第十七卷 或は人口過剰の、 過勢は生殖力を高め、 は之を低下せしめるさ云ふ多くの社會 ふが如 年と計 る時は是年の障碍 何に急速に人口が増加するとも尚人 穫は遙に豐饒となり、 に反對 上せる一定期間を經由せる後 き髪関の絶對に發生せざる 即ち經 或は人口過少の憂惧が の經濟的理由の消滅、 可しど思惟する點に 富裕、安樂、短き 社會主義社會に於 **%**: 組織の變更に 次で配會主義社會 切 砂くども 排除 せらる 向後 依り

る時は、 「社會組織の經濟理論的批判」、 陷る可きを豫想し、 やも知れずと思惟せる故である(小泉信三教授 増加の趨勢を或は緩慢或は停止せしむるに至る りど ると云ふ見解を拒否し、 據る)。即ち **殖力の増加にも拘らず避姙法の採用に依り入口** の爲め却つて大 する場合ありとも、そは一 に依り祉會成員の文化生活を一般に向 化の進展に伴ふ個人性の發達が生殖力を減退す をして多産を嫌忌するに至らし 想する所以は 其限界及び活動の範圍を擴大し、 如く自然的生殖力の低下に基く 思惟する故 一世紀の後には或は人口過剰の傾向に Kautsky は Niti とは正反對に文 社會主義社會に於 いに であ 又逆に人口過少の傾 30 人口增殖を助成する事情有 却つて經濟組織の改善 其人口 部の生物學者の示 三六一三九頁に め 過 ては婦人の向上 少の にあらず 其自然的生 隨つて婦人 上せし 憂惧を豫 \$°

第五號

九九九

と云ふ考察は、 し人類の生殖力で個人性の發達とが相反撥する Kautskyに左袒するを僻せざるものである。 説は暫く措 である。 て人爲的生殖同避に起因す可しと思惟する 奢侈、淫佚、 的に國民の生殖 定するも、 過度の人工的産兒制限の個々招致せる弊資と看 が多産を嫌忌せしめたる為き解するが恐らく正 **全盛期以後の生殖停滯に起因せる** 獨自の現象たりし人口低減が必ずしも同國文化 鶴を穿つに近いであらう。例へば戦前佛巓西に してゐない。古 世界最高に位する反映たるにあらず、却つて 雨者の見解を比較するに私は、他の所 其生殖停滯其物は決して內部的必 き此論點の關する限りに於て 向上欲其他の外部的人爲的諸原 如上の解釋を正當化する ものでは 未だ充分なる歴史的吟味を濾過 代文明諸國の沒落が各自の文化 力が減退せるが爲にあらずし 事を事實と假 は T

> 無い乎。 化の過程に於てい ものである 口過增の趨勢を防遏す可しとの推論を當然導く るゝ事よりも、寧ろ自發的意志の作用に依り人 隨つて將來に於ても亦人類は自らの進 生理的に種の創生力を弱めら

と二致無きものと云はざらを得ない。 رن ه 制限手段が全然人口 する 兩者の見解は決 説に對して如何なる關係に立てるかと云ふに、 の過誤に陷り易きし る人口過少の傾向は、 固より後者の力説する所であり、 る為に Kautsky の豫見を以て是に對照せしめた 以上私は Spencer 或は Nitti の豫見を拒 蓋し前者が憂惧の一たる人口過剰の傾向は 然らば Kansky の のなるに して栓 依 9 の發達を阻害する所の反對 事を豫言せ 此點に於ても亦 人工避姫に起因すと思惟所であり、其憂惧の二た 柄相容れざるものでは無 豫見其物は る後者の 見解 7 ルサスの學 「人為的 而して 否す

であるが、 拒否する所にあらざる可く、 ずしどの自 欲するは、 産兒性交を非難 交即ち人工避姙を

是認するか否認するか には社會道徳は多産抑制の義務を賦課す可しと Kausky 員の性的抑制の義務を認むる根本の見解は又マ には 認むる他の手段に依るか、二者其一を出ですと 判斷は別として、 サスと其帆を一にせるものである。 ルサスの罪惡と認め新マルサス主義の正當と のであるが、 之を罪惡惨禍の發生無しに制限するが爲 ルサス 會に於ても人口過增の は人口過少の場合には社會的道德は無 こは 造物主の目的なりと思惟せざるを得 然神教を遊奉せるマルサスの固より の所謂道徳的抑制に依るか、 「地球を人類を以て充満せんと し其普及を防止す可しご云ふの 共抑制の手段として無産見性 社會一般の福祉の為に其成 又人口 過増の場合 「人口論」批判 向は消滅 畢竟社會 での倫理 或は

> 若しそれ人工避姙是非に至りては、 と云ひ經濟組織の變更を高調する論旨には讃同 義社會に於ても人口過增を防遏せんでして却つ 義は、 に成功せるものと許容するを得ないのである。 爲に必然修訂を蒙る可きものである。 るを得ない。 て諸種の性的惰落を誘致 し得るも の結論に歸着する。 憂惧の一掃せられざる以上、 の原理其物に對しては完全なる反駁を加ふる 寧ろ次に述ぶる生活水準の

> 一般的向上の 尚マルサス「人口論」の根幹たる人 文化の進展に伴び道徳的抑制の意 隨つて Nitti を云ひKautsky 反對害惡を助成す 態に之を是認す 假合社會主

四四

正なる省祭を飲如してゐた「或る時には彼は恰 度の高低に應じて其質量を變する事實に就き儼 もそれが全く生命を辛うじて維持するに必要な V N サスは所謂生存資料なるものが、 生活程

どの區別に關し なる見解の爲に彼は道德的抑制を實行す可き生 Political Economy in 活最低限度とい 看做されるであらう」と云つて ゐる 熄し無智が開始する楷梯に停まる時には、人民 民衆の安樂の増加は必ず るにあらず否其他の嚴密なる必需品のみに依 一般より にもあらず」と云ひ、又他の頁に於ては 3 地位の兩三步の降下も、 他の時には自己の階級及び種姓 Status に關す 配慮並に其子女の教育に闘する配慮等を生存 一定量の資料に過ぎざるかの 點を痛撃せるものは Bagchot である。 の下層階級の安樂は單に て明確なる觀念を逸してゐた。 (少七四) England. P. し も其人口を増 雑 特にそれが教 58)° 如くに限 「人口論」批判 加 日 U

状態に

在り、

其

様式の高下は兎に

刋

支持するに足る

れ然

も彼等の生活低度を變更せざる場合であ

且つ該人口は自制に依つて抑

制せ

時に於ては疑も無く享樂の增進は産兒の

須叟にして新狀態は舊狀態以上の

存人口を彼等が適當と思惟する生活様式に於て

彼等が道徳的生活最低限度、

換言すれば丁度現

加せば人口

1

隨つて増加するであらう。

第二は

を實行せざる場合である。

を維持するに

足

る程度に停まり然も自制

瞬間に於て食糧均

彼等が肉體的生活最

低限度、

換言すれ

、ば脈や

あるは

唯二個の場合のみ。

幻想的害悪で無く實際的害悪であると 包含せしめてゐる。彼は或る頁に於て 肉體を維持す可き生活最低減度 食糧のみに依 此不徹底 (Price: 育が終 一社會 < 3

である。 度を變更するや るや否やを疑ふ。或る著作家連は一世代 彼等の享樂する文化の種 發的 改善を得 時に向上せしむる偉大なる突發的變化は、 的小變化の一連よりも一層民衆の生活低度を 進せしめ易いと云つたが、余の判斷し得る限 に於ては寧ろ民衆の前以ての用意が肝要であ 克己に馴れ なる天惠に依つて して浮華逸樂の國民は如何に偉大なる又突 かは此生活程度の變更如何に懸り、 の連續に依つて利する所絕大である。 人口を急増せず、 余は是に關する一般的方式を發見し得 であらう。 (七七五) も知る可 たる真に節儉的の國民 r 唯各個人が平均的に生活 巨富を得るとも、 からず しない 其幸福を増進する。是 類如何に關聯するもの 一國民が二者何れの道 であらう。人口 然らば安樂の 「人口論」批判 は、 全般を 概して 且っ

> 活し、而して其平準は向上しない 善化せざるものである。 (Bagehot: Economic Studies. 彼等は同一の平準に PP. 146-147) であらうし 生

變性

のものである

何に故とならば、

道德的生活最低限度は洵に

n

からである。民衆は其生活

らう。然し此事情は必然的に起るものでは無い

を 享受する所の人口を増加せるのみとなるであ

安樂を各個人に寄與する事無く、

唯舊來の安樂

增加

こない

私は 甚だ 3 存し、更に又時代より時代へ、世代より世代へと 文化の程度に對應して伸縮す 可き は必 然であ 去に於ても着々向上し來れるは明白なる事實で ある。洵に生活の平準は假命一國内の階級差別 に照破せらるくに及んで一層熾烈を加へたので 文化の進展に伴ひ向上の趨勢あるは を撤廢するとも、 唱せられたる勞銀 ある。隨つて道德的生活最低限度なるものが、 特に如上の非難はマルサスの學説を基礎に提 是が爲にマ 脛視せるは爭ふ可からざる缺陷であつた。 Bagehot・の非難に同意するを憚らぬ。 サスが此事理を全然無視せざるまでも 國民と國民とに依る高低は尚 サスの根本思想が振撼せらる 鐡則説の虚妄が、 固より 現實の事象

_ O E

幹は 容せるに拘らず、 得ざり 理である。 で増殖す可き潜在的傾向は一 る生活水準を維持するに必要なる資料を凌駕し 物の し道徳的生活最低限度の噂位と、 生乃至要望せらる可き普遍性を毫末も裏切る のでは無 8 形態の古びたるのみにて 不朽の真理であり、 pli 他の事情に變化無き限り、 個 存在乃至必要とは、 のと思惟するは許容し難き謬見 性を保有が 歐諸國の生活水準が著しく向上せるを認 し前 して伸縮異 概念である。 故に 世紀の驚異 い。否等の生活水準にして向上すれ せるも Marshall セトル (七七六) 们マル 同有る事は、後者が す可き科學の發達に のと断言して 前者が各國各時 且つ是に附隨する論議 サスの 明確に區別するを要す 辨 、具本質は 層顯著となるの 人口 人口が此 サスの D 0) 依然多大 る。 原 何日 代 豫見し 理 向上 の文化 抑制其 3 E の根 依 \$ 2 道 ·fr は

經續す に限局せず、 激増するが如き良好なる狀態 30 T 情がある。 全世界に に生活水準 ຜ່ານ (Marshall: Principles of 一十九 る事の不可能なる可含は今に於ても尚眞理であ の場所に於ては變化する),一般的に增加せざ 脹に對する諸種の制限が する時はマル 180.)°. 然も既 一方に人口過增の趨勢に逆抗するが、 即ち 世紀の末葉に於て强づせられ るとも所詮恒 現在四歐諸國に普及せる安慰なる生活が 傳播し且 文化の發達或は經濟組織の 故に省察を單に此良好 文化の進展は生産技術の發達に依 述の如く生存資料が人口を歴倒 Ó 叉天變戰亂等 向上に依つて、 サスの所論は つ数百年に亘りて之を持續す 人的 現象とは (其様式は固 U) 依然 は 他方に之を擴大す Economies, 6th ed. 時的影響を度外 樂観し として真質 なる有限期間 假令或る期間 12 變更に る人 4 難ら事 T 辟 2 る

るであらう。
を中心として道徳的抑制の必要を再現するに至持久せんが爲には、其改善向上したる生活水準持の世のとして道徳的抑制の必要を再現するに至って現在以上に遙に人類の幸福の増進せらると

當然不 て冒頭を起筆せる本稿は又兩者の對照を以て結 を句滅するの概がある。 的 點を現存經濟組 ンとマ 風與す 傾向に 8 0) 杉の價値を是に許 如くに論じ來れ なれるも、 なる意義を保持する乎。兩者の對照 若 人後人に依 在りと し彼れ 3 (七七七) スご往年相對時せる論爭は 尚其根本思想は 着做さば、敢て絕大の價 の學説の真鼈を人口過增の潜 織の擁護に在りと看做さば、 つて多種多様の母難搏撃の 13 ば ~~ 容するを得な いであらう。 人若し彼れの學説の N サスの「人口論」た 一片不易の 「人口論」批判 然らば いであら を以 現代 值 眞 8 7,

十五

情の發展と相呼應して一層合理的なる各派の耻 紀に生き而して十九世紀に 會運動を輩出せ 革命的精 の共儘に受容し能はざる所 想的情感より奔 甦生せる み」と評したが、 組より逃 サス Leslie Stephen の主張せる現存社會制度擁護の論據は 神は、 於ては支持するを得ない。 れて新社會の建設 8 のと言ひ度 しめた。 駸々たる科學的進步及び經濟事 私は更に せる其理想郷は、 7 4 ٦° ンを目 を翹望する熱烈なる なるも、 彼は二十世紀に は唯だ生き殘 **.** より ンに對峙 してい 到底現代 (縦不羈の 尚因 一襲の緊 L 十八 b 於 L 到 空 7

の罪に歸する見解の正邪は Marx の「資本論」組織の實に歸するに對し、マルサスが全然個人第一にゴドキンが現在の一切諸惡を專ら制度

第五號 一〇五

0 **剂**: 歷史的 明確に の認容する所である。 會的 前に早く労働者が不斷の不安に脅威せらる 即ち彼等の貧窮が彼等の左右し得る以外 原 人口法則の爲に、 決定してゐる。 因に其大部分を負ふ事は、 資本主義社會に特有な 自然的人口法則の作 多数の 人

する所である。

なを强請するの不可能なる所以も亦衆目の一致も時間的にも品性を淘冶する餘裕無さ彼等に、も時間的にも品性を淘冶する餘裕無さ彼等に、とび經濟的にある。

・ 増進す可きも現在の富裕者の强烈なる幸福が減措學に照應するも、彼れの改革否認論は當然崩潰しなければならぬ。彼は「最大多數」なる観念を重視し、・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ではの改革否認論は當然崩落の正統の正確にといり、

て同 は現代に適合せざる一方ゴド 倫理 **3** の幸福を給付し得る可能的機會を放意に逸する 極的意味に於ては多數が多量の不幸を甘受し、 である。 的意味に於ては一層多數の人々に一層多量 するも 觀に背戻する 福を享受する 一の該原理より 然らば畢竟現在の資本主義經濟組織は、 理 のがある。 即ち可及的多數の 加を支持するを得可しと云ふので そは兩面 ものと云はねばなら を以て至上最善の理 出發せるマ より二重の意味に於て功 人口が可及的多量 中 ルサスの社會視 ン のそれは傾聴 85 想を爲す 隨つ

或は 後に其是非の批 自ら之を標榜する亞流が、 ₩ 想では 社會の の時代に 純正マルクス學派の嫡流。 立を翹望するは、 於て之を翹望する程に架 は 暫く措いて 政府無き共産の 今日無政 ٦, ٦, 丰

> の權威 却つて大多數の人々に現在以上の幸福を賦與し 社會に進化する時は Kausky 等の證明に依れば現存經濟組織は科學 罪悪慘禍を伴はざる健全合法なる人口增加は自 を匡救するのが、 3 3 の進步を認め ら観迎する所で爲し、 理には妥つてゐる る観念よりも 代並に貧富の懸隔の輕微なる時 可き所論である 第二として、 者相率のて窮乏に陷る誘因 退す可しとの論據を第一 且 の圓滿なる發揮を阻害し、 つ少數富者の巨富を以て多數貧者の痛苦 期の如きは下層階 τ 飽くまでも革新論議を拒否 「最大多數」なる觀念に重きを置 ねる。 現代は 姑息ではあるが寧ろ功利の原 他方に於てマ 何等の罪悪惨禍を見ずに、 又人口の刺戟に基く科學 然るに今 却つて「最大幸福」な ح 級民の少數なる時 る可しとの論據 代にのみ適合す 且つ社會主義 ルサスは何等 Marx 4 れは多 してゐ 或は

n を現代に見出 求する ある。 みなり」と云ふゴドキンの所言は 蛇蝎視せられ 明白なる現實の事質なのである 世界環視の中に勇敢なる試練の門途に上れるは 梯たる集産主義的社會の一變態が、 狀態を究竟の理想と爲すは學徒の 十年を出でずして倒潰す可しとのマル 類に利益有る制度を敢て囘避するは は 却つて「遙遠なる將來の危惧を慮りて今日 Kausky 其他の科學的攻究に依 如き理想郷は人口 而して更に此絕對境に到達す可き中間楷 すに至つた。 或る者には祝福せられ 法則の作用に依つて三 0 以敷多の共 ۲, ب 周 知する所で 或る者には つて裏切ら つゝ今や全 近愚の 1). ヰンの希 スの所 鳴

察を彼れの人口の原理其物に轉換する時は、私せる點に關する批判に停まる事である。一旦省ルサスが現存社會制度を恒久至善のものと看做を併发に銘記す可含は以上の縷述は、畢竟マ

第五號 一〇七

路を見出さんどする傾向を有するものではある 或る階調を保たしむる所に、新たなる向上の一 然人類の經濟的發達を刺戟する一方、 **外に改めないであらう。先づゴドキンの理想を** 存資料を凌駕して増加す可き潜在的傾 無しには完全なる福祉を享樂するは藍 まい乎。 生かし然る後にマルサスの説話に聴く。 自制心を提醒する所の力强き誘因たる可きを永 であらう。 於て現代は往年相拮抗せる兩思想家の精神に 依然それが赫耀たる眞理を包含せるもので思 の進展を見るも社會各員の道徳的自覺の協力 せざるを得ない。 假令社會主義社會に於ても 如何に驚異に價する物質文 其道德的 人口が生 一し不可能 向は、 此意味

なる發揮を期待し得可きや否や。私は是に關す吾人は其處にマルサスの所謂道德的抑制の圓滿然らば假に社會主義社會の實現を想定して、

る論斷を回避し度いと思ふ。蓋し人性は所詮環境の支配を免れぬ。故に現存社會制度の下に歸くの性情を類推せんと欲するは不合理であるからである。唯だ其曉に於ても、社會全般の福祉の為に道德的抑制が決して全然無用の說法に歸せざる可きは想像に難くない。而して其然る限りである。唯だ其曉に於ても、社會全般の福祉の為に道德的抑制が決して全然無用の說法に歸せがる可きは想像に難くない。而して其然る限りである。(完)

基督教義と羅馬法理(上)

製トマスの徴利論に関する考察の中し

打村鑛三

壌後の世界を承繼して俗界の支配權をも、 の宗教であつた。け 道徳的優越や、 亦この特徴を見ることが出來る。 その立場より、 に奉仕せしむるにあつた。教會利子禁止論にも ころは、六合(the world)を三濱(clersical interests) スコラ哲學であつた 洵に原始の基督教は、あらゆる智識的優越や、 かなかつた。 であるが、これに合理的援助を與えたのは、 そう何時までも他界主義を持するわけには 間に自然に贏ち得るやうにな 世間的優越を撤せる純なる心情 ひたぶるに禁止の為に奮闘した かくて中世精神の目的とすると れどもこれが西羅馬帝國崩 而して教會は つてから 侵入

テネとエルサレム、アカデミーと教會、異端者人であつた。げに哲學は希臘の病氣である「アゼルに歸せんとした基督教は、また哲學とも他神のものは神に歸し、カイゼルのものはカイ

と信 には、全然貫徹されたのではなくて、かく**叫**んだ の哲學、 のは、 のであつた。この表れ はなくて、軈てこの兩者はお互に接近して來た テリトリアヌスさえも。 督教的哲學はスコラ哲學に大成し、これは中世 而してこの間、 たのであつて 徒との間に何の交渉があらう」。 次に出たスコラ哲學の任務であつた。 教會の學問となったのである。 以上の記述に主さして、J. D. Erdman, A H.story この 教會の教義は漸 出來上つた教義を論證する が所謂教父哲學である。 全然哲學を拾てたので くその體を成し

of Philosophy, 3 vols., 1893; Geschichite der Philosophie 2 A. 1900; 安倍能成、四洋古代中世哲學史、各スコラ哲學の條を參考したり。

Aquino の伯にして Lovetto 及び Baleatrs の倒主たる、 Loudolf の子 Thomas Aquinas (12 27-1274) も、質に大神學者たるのかたはら、

第五號 一〇九

スコラティズムの碩學であつた。彼に於て最高な

(七八一) 雑 錄 基督教義と羅馬法理